

$\mathbb{R}^3, \mathbb{R}_1^3$ の曲面に関する Kenmotsu 型公式の統一化と応用

國分 雅敏 (東京電機大学・工学部)

\mathbb{R}^3 の極小曲面を記述する公式として、Weierstrass-Enneper の公式が広く知られている。極小曲面ではない場合については、「(単連結) 2次元多様体 M 上に、関数 H と球面への写像 \mathbf{n} が与えられたとき、それらを平均曲率および Gauss 写像にもつ \mathbb{R}^3 内の曲面が存在するための必要十分条件を与え、実際にはめ込み関数 $f: M \rightarrow \mathbb{R}^3$ を構成せよ」という問いに、1979年、剣持先生 ([4]) が解答を与えた。今では、その曲面を記述する式は Kenmotsu 公式と呼ばれている。

これに続き、Lorentz-Minkowski 空間 \mathbb{R}_1^3 の場合にも、空間的曲面については [1] において、時間的曲面については [6] において Kenmotsu 型公式が与えられた。

1 Kenmotsu (型) 公式再訪

論文 [4], [1], [6] では局所座標系を用いて主となる公式が記述されているのだが、それらを座標系なしの形で記述することから始める。

\mathbb{R}_1^3 にて、符号 $(++-)$ の 3次元 Lorentz-Minkowski 空間を表し、 M で向き付けられた 2次元多様体を表す。

1.1 Kenmotsu 公式

Theorem 1.1 ([4], [5]). $\mathbf{x}: M \rightarrow \mathbb{R}^3$ をはめ込みとする。ただし、極小はめ込みではないとする。 \mathbf{x} は、平均曲率関数 H と Gauss 写像 $\mathbf{n}: M \rightarrow S^2 \subset \mathbb{R}^3$ により、次式で復元される：

$$\mathbf{x} = - \int \frac{1}{2H} \{d\mathbf{n} + \mathbf{n} \times (*d\mathbf{n})\} \quad (1.1)$$

ここで、 $*$ は誘導計量に関する M 上の Hodge $*$ 作用素。そして、 H, \mathbf{n} は次式を満たす：

$$\frac{dH}{H} \wedge \{d\mathbf{n} + \mathbf{n} \times (*d\mathbf{n})\} = \mathbf{n} \times (d* d\mathbf{n}) \quad (1.2)$$

逆に、 M 上に (1.2) を満たす関数 H と写像 $\mathbf{n}: M \rightarrow S^2 \subset \mathbb{R}^3$ が与えられたならば、それらを平均曲率、Gauss 写像にもつ曲面 $\tilde{\mathbf{x}}: \tilde{M} \rightarrow \mathbb{R}^3$ が (1.1) により得られる。ここで \tilde{M} は M の普遍被覆を表している。

Remark 1.2. (a) 証明は、局所座標系で記述された証明 ([4]) を丁寧になぞってもよいのだが、構造方程式を一から書いてみるほうが、見通しが良いようである。[5] には、動枠による証明を載せてあるので、そちらを参照されたい。

(b) 後半の主張は「周期条件が満たされれば」という条件を付せば、「 M からのめ込みが得られる」と述べることもできる。

とくに平均曲率 H が一定の曲面 (cmc- H 曲面) に限ると、定理は次のように述べられる。

Corollary 1.3. $\mathbf{x}: M \rightarrow \mathbb{R}^3$ を cmc- H 曲面とし, $\mathbf{n}: M \rightarrow S^2 \subset \mathbb{R}^3$ をその Gauss 写像とする. このとき, \mathbf{x} は次式で復元できる.

$$\mathbf{x} = -\frac{1}{2H} \left\{ \mathbf{n} + \int \mathbf{n} \times (*d\mathbf{n}) \right\}. \quad (1.3)$$

そして, \mathbf{n} は次の方程式を満たす.

$$\mathbf{n} \times (d * d\mathbf{n}) = \mathbf{0}. \quad (1.4)$$

を満たす.

逆に, (1.4) を満たす写像 $\mathbf{n}: M \rightarrow S^2 \subset \mathbb{R}^3$ が与えられたとき, 公式 (1.3) により cmc- H 曲面 $\mathbf{x}: \tilde{M} \rightarrow \mathbb{R}^3$ を得ることができる.

Remark 1.4. (a) (1.3) の一部分

$$\mathbf{x}_0 = \int \mathbf{n} \times (*d\mathbf{n})$$

は Gauss 曲率が一定値 1 の曲面 (cgc-1 曲面) である. これは, cmc 曲面の平行曲面族が cgc 曲面を含むことから理解できる事実である. なお, ここで登場する cgc-1 曲面は特異点を持ちうるものであることも注意しておく.

(b) (1.4) は $\mathbf{n}: M \rightarrow S^2 \subset \mathbb{R}^3$ が調和写像であるという条件で, $\Delta \mathbf{n} \parallel \mathbf{n}$ と言い換えられる.

1.2 Kemmotsu (型) 公式の統一

\mathbb{R}_1^3 の曲面についても同様である. 上述の定理を含んだ形で述べると次のようになる.

Theorem 1.5 ([4], [1], [6], [5]). \mathbf{x} を (i) はめ込み $\mathbf{x}: M \rightarrow \mathbb{R}^3$, (ii) 空間的はめ込み $\mathbf{x}: M \rightarrow \mathbb{R}_1^3$, (iii) 時間的はめ込み $\mathbf{x}: M \rightarrow \mathbb{R}_1^3$ の何れかとする. \mathbf{x} の平均曲率を $H (\neq 0)$, Gauss 写像を \mathbf{n} とする. このとき,

$$\mathbf{x} = \int -\frac{1}{2H} \{ d\mathbf{n} + \mathbf{n} \times (*d\mathbf{n}) \}. \quad (1.5)$$

そして, H, \mathbf{n} は次式を満たす:

$$\frac{dH}{H} \wedge \{ d\mathbf{n} + \mathbf{n} \times (*d\mathbf{n}) \} = \mathbf{n} \times (d * d\mathbf{n}). \quad (1.6)$$

逆に, M 上に (1.6) を満たす関数 H と写像 \mathbf{n} が与えられたならば, それらを平均曲率, Gauss 写像にもつ曲面 $\tilde{\mathbf{x}}: \tilde{M} \rightarrow \mathbb{R}^3(\mathbb{R}_1^3)$ が (1.5) により得られる. ここで \tilde{M} は M の普遍被覆を表す.

とくに, (non-zero) cmc- H 曲面の場合に限れば, (1.5) は

$$\mathbf{x} = -\frac{1}{2H} \left\{ \mathbf{n} + \int \mathbf{n} \times (*d\mathbf{n}) \right\}$$

(1.6) は

$$\Delta \mathbf{n} \parallel \mathbf{n} \text{ ((i), (ii) の場合),} \quad \square \mathbf{n} \parallel \mathbf{n} \text{ ((iii) の場合)}$$

と書き表される.

Remark 1.6. (a) 各場合 (i)–(iii) に応じて, Gauss 写像は (i) $\mathbf{n}: M \rightarrow S^2 \subset \mathbb{R}^3$, (ii) $\mathbf{n}: M \rightarrow H^2 \subset \mathbb{R}_1^3$ or (iii) $\mathbf{n}: M \rightarrow S_1^2 \subset \mathbb{R}_1^3$ への写像である.

(b) (ii), (iii) の場合のベクトル積 \times はローレンツ的ベクトル積である.

(c) (iii) の場合の $*$ は Lorentz 面 $(M, [du^2 - dv^2])$ に関する $*$ 作用素である.

2 応用例 1 : \mathbb{R}_1^3 の Delaunay 曲面

\mathbb{R}_1^3 の Delaunay 曲面 (平均曲率一定回転面) を可能な限りシンプルに書き下す. そのために, 適宜 \mathbb{R}_1^3 を $\mathbb{C} \times \mathbb{R}_1^1$ もしくは $\mathbb{R} \times \mathbb{C}$ と見なす. ここで \mathbb{C} は実 2 次元ベクトル空間

$$\mathbb{C} = \mathbb{R} \oplus j\mathbb{R} = \{a + jb \mid a, b \in \mathbb{R}\}$$

に, 積を

$$(a + jb)(c + jd) = ac + bd + j(ad + bc)$$

で定めた可換な \mathbb{R} -多元環である. とくに $j^2 = 1, j1 = 1j = j$ である. \mathbb{C} の元は, パラ複素数もしくは分裂複素数などと呼ばれる. Lorentz 内積と相性がよいため, \mathbb{R}_1^2 と \mathbb{C} は同一視されることがある. 本稿でもそうである. $e^{jx} = \cosh x + j \sinh x$ なる記法もしばしば使われる.

$\sigma = \sigma(u), \gamma = \gamma(u)$ を $\gamma^2 - \sigma^2 = 1$ を満たす実一変数関数の組とする. このとき

$$(i) \quad (u, v) \mapsto \begin{pmatrix} e^{iv} & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \sigma \\ \gamma \end{pmatrix} \in H^2 \subset \mathbb{C} \times \mathbb{R}_1^1 \quad (ii) \quad \begin{pmatrix} e^{iv} & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \gamma \\ \sigma \end{pmatrix} \in S_1^2 \subset \mathbb{C} \times \mathbb{R}_1^1$$

$$(iii) \quad (u, v) \mapsto \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & e^{-jv} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \sigma \\ j\gamma \end{pmatrix} \in H^2 \subset \mathbb{R} \times \mathbb{C} \quad (iv) \quad (u, v) \mapsto \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & e^{-jv} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \gamma \\ j\sigma \end{pmatrix} \in S_1^2 \subset \mathbb{R} \times \mathbb{C}$$

という \mathbb{R}^2 からの 4 つの写像が考えられるが, これらが調和写像であるための方程式はどれも

$$(\sigma'\gamma - \sigma\gamma')' - \sigma\gamma = 0 \quad (2.1)$$

である. つまり 4 つに対して共通の方程式である. ただし, M は共形構造 $[du^2 + dv^2]$ もしくは Lorentz 的共形構造 $[du^2 - dv^2]$ を持つとする. 更に, (2.1) は, その解を Jacobi の楕円関数で簡単に記述することができる. 実際, (2.1) の解は

$$\sigma = \text{cs}(u, k), \quad \gamma = \text{ns}(u, k) \quad (u = \pm u + C) \quad (-\infty < k^2 < \infty)$$

である. (ここで, 母数 k は任意の実数または純虚数でよいということ.) そしてこれらの調和写像を \mathbf{n} として Kenmotsu 公式を適用することで cmc- H 曲面が得られる. 今回の場合, 回転不変なもの, つまり Delaunay 曲面が得られる. 実際, $-2H\mathbf{x}$ は次の通り:

- (i) 時間軸回りの空間的 cmc 回転面 (sDS-t) (ii) 時間軸を回転軸とする時間的 cmc 曲面

$$\begin{pmatrix} e^{iv} & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \left\{ \begin{pmatrix} \sigma \\ \gamma \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} \sigma'/\gamma \\ \int \sigma^2 \end{pmatrix} \right\} \quad \begin{pmatrix} e^{iv} & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \left\{ \begin{pmatrix} \gamma \\ \sigma \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} -\sigma'/\gamma \\ -\int \gamma^2 \end{pmatrix} \right\}$$

- (iii) 空間軸を回転軸とする空間的 cmc 曲面 (iv) 空間軸を回転軸とする時間的 cmc 曲面 (1)

$$\begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & e^{-jv} \end{pmatrix} \left\{ \begin{pmatrix} \sigma \\ j\gamma \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} -\int \gamma^2 \\ -j\sigma'/\gamma \end{pmatrix} \right\} \quad \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & e^{-jv} \end{pmatrix} \left\{ \begin{pmatrix} \gamma \\ j\sigma \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} \int \sigma^2 \\ j\sigma'/\gamma \end{pmatrix} \right\}$$

ここに登場した $\sigma'/\gamma, \int \sigma^2$ も,

$$\sigma'/\gamma = -\text{ds}(u, k), \quad \int \sigma^2 = -\{\text{cs dn} + E \circ \text{am}\}(u, k)$$

というように, 楕円関数, 楕円積分を用いてシンプルに記述できることを補足しておく.

\mathbb{R}_1^3 内には、他にも回転面はいくつかある。手順は同じなので、曲面の式のみ記しておく。

(v) 空間軸を回転軸とする時間的 cmc 曲面 (2)

$$\begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & e^{-jv} \end{pmatrix} \left\{ \begin{pmatrix} s \\ c \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} -\int c^2 \\ -s'/c \end{pmatrix} \right\} \quad (2.2)$$

where $s = k \operatorname{sn}(u, k), c = \pm \operatorname{dn}(u, k)$ ($u = \pm u + C$) ($0 < k < \infty$).

Remark 2.1. (2.2) の母線 ($\{$ 内の式) は、 \mathbb{R}^3 の Delaunay 曲面 の母線と ‘同じ’ である。詳しくは、 $\mathbb{R}^3(\mathbb{R}_1^3)$ の計量構造を無視してしまえば、同じ方程式で定まる曲線ということである。

(vi) 光的軸を回転軸とする空間的 cmc 曲面 (vii) 光的軸を回転軸とする空間的 cmc 曲面

$$\frac{P}{2} \left\{ \begin{pmatrix} \phi - \frac{1}{\phi} \\ 0 \\ \phi + \frac{1}{\phi} \end{pmatrix} - \int \begin{pmatrix} 1 + \frac{1}{\phi^2} \\ 0 \\ 1 - \frac{1}{\phi^2} \end{pmatrix} \right\} \quad \frac{P}{2} \left\{ \begin{pmatrix} \phi + \frac{1}{\phi} \\ 0 \\ \phi - \frac{1}{\phi} \end{pmatrix} - \int \begin{pmatrix} 1 - \frac{1}{\phi^2} \\ 0 \\ 1 + \frac{1}{\phi^2} \end{pmatrix} \right\}$$

where

$$P = P(v) = \exp \left\{ v \begin{pmatrix} 0 & -1 & 0 \\ 1 & 0 & -1 \\ 0 & -1 & 0 \end{pmatrix} \right\},$$

$$\phi = u \text{ or } \frac{\sin ku}{k} \quad (u = \pm u + C) \quad (-\infty < k^2 < \infty, k \neq 0).$$

(vi), (vii) については、初等関数のみで表されることに気づく。

3 平均曲率一定らせん面

本節では Euclid 空間 \mathbb{R}^3 の曲面に話を限定する。80 年代に Do Carmo-Dajczer [3] は平均曲率一定らせん面を決定した。実際それらは 2 パラメタ族として分類される。ここでは、Kenmotsu 公式で Do Carmo-Dajczer の分類を述べる。その応用として、2, 3 の幾何学的命題が示されることを紹介する。

Lemma 3.1. μ, b を $0 < \mu \leq 1, 1 \leq b \leq 1/\mu$ を満たす定数とする。

$$\mathbf{n} = \begin{pmatrix} e^{iv} & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} e^{ig} & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \sqrt{1 - \mu^2 b^2 \operatorname{sn}^2(bu, \mu)} \\ \mu b \operatorname{sn}(bu, \mu) \end{pmatrix} \quad (3.1)$$

where $g = \frac{\sqrt{(1 - \mu^2 b^2)(b^2 - 1)}}{b} \Pi(\operatorname{am}(bu, \mu), \mu^2 b^2, \mu)$.

により定まる $\mathbf{n}: (\mathbb{R}^2, [du^2 + dv^2]) \rightarrow S^2$ は調和写像である。

任意の cmc- H らせん面 \mathbf{x} (cgc-1 らせん面 \mathbf{x}_0) は、(3.1) を Gauss 写像とする曲面に合同である。

Proposition 3.2. Lemma 3.1 の \mathbf{x}, \mathbf{x}_0 を具体的に記述すると次の通り：

$$-2H\mathbf{x} = \begin{pmatrix} e^{iv/b} & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} e^{ig(u)} & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \{ \mathbf{n}_0(u) + \tilde{\mathbf{x}}_0(u) \} + \begin{pmatrix} 0 \\ c_1 v/b \end{pmatrix}$$

where

$$c_1 = \sqrt{(1 - \mu^2 b^2)(b^2 - 1)}, \quad \mathbf{n}_0(u) = \begin{pmatrix} \sqrt{1 - \mu^2 b^2 \operatorname{sn}^2} \\ -\mu b \operatorname{sn} \end{pmatrix} (u, \mu),$$

$$\tilde{\mathbf{x}}_0(u) = \begin{pmatrix} \frac{\mu b (b \operatorname{cn} \operatorname{dn} - i c_1 \operatorname{sn})}{\sqrt{1 - \mu^2 b^2 \operatorname{sn}^2}} (u, \mu) \\ (b - 1/b)u - bE(\operatorname{am}(u, \mu), \mu) \end{pmatrix}, \quad g(u) = \frac{c_1}{b} \Pi(\operatorname{am}(u, \mu), \mu^2 b^2, \mu).$$

c_1 はらせん運動のピッチ (pitch) を表す。以下では, Proposition 3.2 中の \mathbf{x} を $\mathbf{x}_{\mu,b}$ と表す。

Remark 3.3. (a) 定数 μ を固定したとき, μ をパラメタとする曲面族 $\{\mathbf{x}_{\mu,b} \mid 1 \leq b \leq 1/\mu\}$ は同伴族 (合同ではないものの, 同じ平均曲率をもつ等長的な曲面族) である。

(b) $\mathbf{x}_{\mu,1}$ は unduloid であり, $\mathbf{x}_{\mu,1/\mu}$ は nodoid である。

Application 1: らせん面は \mathbb{R}^2 からの写像 (つまり, 2 変数関数) により与えられるものだが, 特別な場合として, 一つの変数に関して周期的となることがある。この場合, $\mathbb{R} \times S^1$ からの写像と捉えることができる。このときのらせん面は, らせん状柱面 (helicoidal cylinder) とよばれる。

cmc- H らせん面 \mathbf{x} (cgc-1 らせん面 \mathbf{x}_0) でもそのようなことが起こることを次の定理は主張する。

Theorem 3.4. \mathbf{x} (\mathbf{x}_0) がらせん状柱面となるための必要十分条件は, μ, b が

$$\frac{(1 - \mu^2 b^2)(b^2 - 1)\Pi(\mu^2 b^2, \mu) + b^2 E(\mu) + (1 - b^2)K(\mu)}{\pi b \sqrt{(1 - \mu^2 b^2)(b^2 - 1)}} \in \mathbb{Q}$$

を満たすことである。

この定理は, Burstall-Kilian による次の定理の別証明を与えることとなる。

Corollary 3.5 (Burstall-Kilian's Theorem [2]). 任意の Delaunay 曲面の同伴族は, 無限個の合同でないらせん状柱面を含む。

Application 2: Do Carmo-Dajczer によって既に指摘されていたことだが, cmc- H らせん面は半径大小の 2 つの円柱面の間に挟まれるという, ある種の有界性をもつ。この事実も, 我々の公式で (μ, b で) 述べるができる。以下 H の値は $H = -1/2$ に固定して命題を述べる。

Proposition 3.6. • $\mathbf{x}_0(M)$ は, 半径 $\mu b \sqrt{b^2 - 1}$, 半径 μb^2 の同心円柱の間に挟まれる。

• $\mathbf{x}(M)$ は, 半径 $|1 - \mu b^2|$, 半径 $1 + \mu b^2$ の同心円柱の間に挟まれる。

$R := 1 + \mu b^2$, $\rho := |1 - \mu b^2|$ と置いて, それぞれ \mathbf{x} の (outer) radius, inner radius と名づけよう。一方, \mathbf{x} のピッチは $\sqrt{(1 - \mu^2 b^2)(b^2 - 1)}$ であったことを思い出ししておく。

Proposition 3.7. 対応 $(\mu, b) \leftrightarrow (\text{pitch}, \text{radius})$ は 1 対 1 である。

Corollary 3.8. • cmc- H らせん面は (合同類) を除いて, pitch と radius で決まる。つまり, cmc- H らせん面の分類 (2 パラメタ族) は, pitch と radius による分類と言える。

• cmc- H らせん面が閉じるかどうか (cmc らせん状柱面となるかどうか) は, pitch と radius で決まる。

Theorem 3.9. 2 つの cmc- H らせん面が同じ同伴族に属するための必要十分条件は

$$\frac{\lambda^2 + \rho^2}{\lambda^2 + R^2} \left(= \frac{\lambda^2 + (R - 2)^2}{\lambda^2 + R^2} \right)$$

の値が一致することである。

Corollary 3.10. unduloid と nodoid が局所等長的であるための必要十分条件は, inner radius ρ と outer radius R の比

$$\frac{\rho}{R}$$

が一致することである。

参考文献

- [1] K. Akutagawa and S. Nishikawa, The Gauss map and spacelike surfaces with prescribed mean curvature in Minkowski 3-space, *Tohoku Math. J.* 42 (1990) 67–82.
- [2] F. E. Burstall and M. Kilian, Equivariant harmonic cylinders, *Quart. J. Math.* 57 (2006) 449–468.
- [3] M. P. do Carmo and M. Dajczer, Helicoidal surfaces with constant mean curvature, *Tohoku Math. J.* (2) 34 (1982) 425–435.
- [4] K. Kenmotsu, Weierstrass formula for surfaces of prescribed mean curvature, *Math. Ann.* 245 (1979) 89–99.
- [5] M. Kokubu, Application of a unified Kenmotsu-type formula for surfaces in Euclidean or Lorentzian three-space, preprint, arXiv:1711.05427.
- [6] M. A. Magid, Timelike surfaces in Lorentz 3-space with prescribed mean curvature and Gauss map, *Hokkaido Math. J.* 19 (1991) 447–464.

その他の参考文献・関連する論文は [5] の参考文献リストにあるものを参照されたい.